

地中海

二〇二四年 二月号 (通巻七八九号)

◇今月の二十首詠……三元号を生きて

山下雅子 2

■作品

A 磯田ひさ子・市原やよひ他 4

B 今村叶子他 20

C 糸島美津子他 44

A 秋山真理子他 54

B 鈴木三津子他 68

■オリープ集 植田和子・大寺智子他 36

◇今月の二人 湯浅勢津子・杉本直美 16

私と短歌との出会い (258) 養学登志子 19

■「地中海」創刊50周年記念号より

「地中海」の系譜 椎名恒治 14

■鑑賞・三好直太の歌 7 (へ穴) 久我田鶴子 15

■〈第一歌集を讀む〉11 菊地栄子歌集『山川みどり』 高橋啓子 32

―主体的にうたう―

◇シルクロード・カフェ ―― 【責任編集】 木村文字 42

■遊覧香港〈大野探訪〉 土井谷恭子 34

■歌壇月旦 玉井綾子 35

令和の若者の短歌

■十二月号作品批評 60

A……………牧 雄彦・西堤啓子

B……………安部 律・松本多摩子

C……………神戸良三・富岡明子

オリープ集……………もとむらしげと

高橋啓子

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

最近の歌誌より (編集部) 53

2024年 地中海「東京歌会」ご案内 59

クリップ……………80 神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kaga

三元号を生きて

山下 雅子

木の下を金に染めつつ木犀は今年も季の移ろいに添う

逝く日迫る夫のあの声「いい匂い」のせて木犀ほろほろこぼる

姑のいちほつ鳶尾母のアガパンサス化身のごとし季になずさう

いつの間の三元号を生きてこそ『七十周年記念号』祝ぐ

よみがえる二十余年前代表の死無念の極み代表にわれらに

「これよりは新生『地中海』へ向かって」と若き力に託されし遺志

赤堤本社に一人の美智子夫人高齢の身の毅然とされて

欠員の会計係をとりあえずとその眼差に絆されしわれ

昭和五年生まれ。
習志野グループ所属。
歌集に「陽光」「いのち」、
合同歌集に「習志野」I、IIがある。
昭和六十一年 船橋歌人クラブ創設委員。
平成二年 アンソロジー「現代歌人千葉風
土記」、平成七年 合同歌集「船橋歌人」I
に参加。
千葉県歌人クラブ会員。

商社マンの代表なれば会計は複式簿記に処理されており

算盤と電卓に成す決算書類不馴れの薄記に重き八月

眼裏にありありとして西福寺香川夫妻の奥つ城所

九曜忌に先導されし柏原氏、椎名・市原氏も代表の許へ

遺志成りし『七十周年記念号』供うる墓前に底光りする

「ようやった今後も頼むぞ」久我・和美・磯田、皆々に高いの声

手を繋ぐ代表と五歳の孫は笑む歌集『陽光』の記念会場

孫は今六人の母なりひまご皆の産声聞きし幸を授かる

ママ雨だ お空が泣いてるどうしよう ひまご三歳は窓辺離れず

漏らしたの だってママぼく自動なの 駿足球児四歳の頃

おばあちゃん手に模様がついてるね この子は皺をいつ知るのだろう

「考える葦」なる人間の尊厳にいかに関わるや生成AI

作品 A

磯田ひさ子

秩父

・森

尺ほどの杓子菜の匂杓文字形の広き葉ごとに緑みなぎる
 かつかつに暮らしし秩父を潤しぬ洪沢栄一 秩父鉄道
 山肌に粗く残りし野面積み耕して耕して人ら生き来し
 夕ぐれの秩父盆地の色沈み山脈遠くゆるく起き伏す
 共に会ひ共に学べる吟行の今日を哀しく思ふ日あらむ
 紅葉のライトアップに行きし友たつた一葉をわれにくれたり
 かなしきもうれしきはなほ命には限りあること切なかりけり

市原やよひ

夫

・萬

一言の返事欲しくて振り返るそこには居ないあなたは居ない
 突如来る悲しみ捨つる所なく一人の部屋は一人のままに
 それらしく形整え寝かせおく隣のベッドの大きぬいぐるみ
 一文字も書かれていない手帖あり病院からの荷物の中に
 夫の歌迎りて行けば顔を出す孫達いつもおじいちゃんが好き
 さりげなく夫の様子に触れて来る一人し行ける馴染の花屋
 花苗を夫と買ひし店先は今日パンジーの色に溢れて

梅本武義

猪

・羊

新道の完成は小学五年にて記念樹の桜古稀を越えたり
 山深く父が秘密の松茸の城へ連れくれし少年の日よ
 松が枯れ雑木林と竹林に猪増える限界集落
 猪の侵入口と出でし場所の修理で八十路の一日が終る
 猪が登場すればわが短歌と雑談の歌会秋の日暮るる
 うさぎ追いし山は猪棲みつきて老いの心に唱歌しみじみ
 猪へ孫と仕掛けた罌を見に最初の一匹今日か今日かと

大浪美雪

浜松

・森

大井川天竜川と大さ河越えて遠州浜松にゆく
 浜松駅迎へくれたるピアノ演奏若きピアニストの連打を浴びる
 ホテルより遠く見ゆるは海にして水平線の背き半円
 「地中海」にこの人と追ふYさんに隣りすもああ笑み交はすのみ
 遠州は家康の地の浜松城急坂をさけゆるゆる登る
 石垣は往時のままの野面積み人丈程の石に手をあつ
 浜松はうなぎの名所快く留守居の夫の家苞にせむ

奥田陽子 枯れるもの

・羊

神田鈴子

冬の訪れ

・大

玄関の通路に濯ぎ物干せり老いて小さくなりにし人の
足弱く転びしという人に添い階を降りど見送りしのみ
付きゆくというは叶わず見送りてしばらくを風のなかに立ちおり
枯るるもの皆枯れ果てし一夏なり伏しいるものも火に焼べゆかん

貯水池の荒草群の色変えて風立つときを穂の波となる
橋までと定め歩めり時おりを川は不穩の表情をみせ
四季はもう無くなるという穂の紫蘇のちいさき花を着けはじめたり

小野雅子

筆記体

・羊

予報どほり路を濡らして降り出だす冷たく寂し霜月の雨
読み終へるのには惜しくて数ページわざと残しぬ新刊歌集

読みさしの雑誌とざしてテレビジョンの相撲に見入る霜月の夕
黒いまはしの二人が上る霧島と正代 九州場所の三日目

もつくんに出す便りには誤字を書くわけにはいかず辞書に確かむ
筆記体は習はぬといふ孫のため一字づつ書くクリスマスカード
筆記体はやく書くための訓練は無用となつて過ぎしとしつき

上林節江

はららく

・湾

生くること心悲しかりらくと出来きたること今日はミスです
正体は分かっているのだが體の分かっているがまだも引き摺る

苦にされず踏むもされずに道の端エノコログサの穂は栄えい
うるこ雲高だかとなり寂しいと言つたらパチがあたるだろうか
葉に透けて櫛の木立はこがね色心を奮いどんと踏み入る
冬せまる水槽の森いちまいも残さぬごとく木の葉散く
静寂の木立に長く夕明り短き秋を惜しむごとくに

街路樹の銀杏も黄ばみ初冬へと季の移ろひ語り初めたり
待ちかねし秋は早くも通り過ぎ一足飛びの冬の訪れ
北国は早や雪景色わが街にも今朝は木枯し一号が吹く
予期せざる冬の到来今宵より厚き布団にくるまりて寝ねむ

思ひ立ちて今日は見知らぬ道をゆく桜紅葉の散りし道を
鈴なりの柿の実入りつ日を浴びてきりり艶めく宵空を背に
早やばやと「おせち」の広告舞ひ込みてひと月あとは歳末と知る

菊地栄子

精米機

・海

野の草の緋の色まさる忘れ草胸にとどめて忘るるはなし
にわか雨屋根打つ音の短さよ夕の水やりたっぷりとせん
傘差しつつ背葉並木を通るとき何か楽しきまだ乾く道
片手をばあずけひと思っているほとほり温き夕の電柱

何度目の収穫ならん両の掌に花咲きはじむ茗荷を乗せて
立秋を過ぎてよみがえる茄子の花深きむらさき六つ七つ八つ
土曜日電気屋の散らしがっつりと胸つかみきぬ「家庭用精米機」

草刈十郎

赤とんぼ

・世

マスクずらし一口飲みてまた戻しビールの味もわからず終ひ
日は低くなりていささか秋めけど残暑以上に燃ゆる虎キチ

人生は片道切符人はみな二度とは戻ることはかなはず
残暑去り高き秋天仰ぎつつ足の弱りのもどかしかりき
わが人生振り返りみて露の世をこれからもまだ生きてゆきたし
あれこれとやりたきことあり動かさざる体もてあまし叫びたき日よ
庭に付つわれのまはりを赤とんぼ即かず離れず飛びてゐたるも

河野繁子 途次 雁

明け方の間に立つ孫北海道の帰りの途次と姿あらわす
事故のあり高速を降り我が家に思わぬ福をとどけたり
めずらしき札幌ナンバーハイエースみやげ降ろして帰りにゆけり
ネクタイの嫌いな彼が転職のまた公務員 北国は雪
立冬とう季節さまようこの地球夏日のとどく 記録になきと
これ出来ぬおよよと退る弱虫は人には見えず薔薇咲かせおり
「女房はどこへ行った」と我に聞くまほろしの野をどこまで歩く

小林能子 「戦」—今年の漢字— 羊

兵越峠「国盗り綱引き」も四年ぶり信州軍遠州軍の激突
三河国から行司も立ちて人びとの見守る綱引き三本勝負
国境一メートルの攻防に歓声あがり山紅葉燃ゆ
リーグ優勝ビデオに集ひ「六甲おろし」未だ猛虎会健在なるらし
内戦も飢餓もなき国の年の暮れ選ばれし今年の漢字は「戦」
世界中がバンデミックを共にして一つの平和も分かち合へぬとは
この世界にだれにも判らぬものとして平和への道 黄泉平坂

近藤栄昭 金沢金箔 虹

「新津から上野だねえろ大阪行き」母の念押し秋雄少年
中学を卒業してから背が伸びた職人を跨る箔の薄さを
金箔に恋して看護師辞めて嫁す医のピンセット箔を広げる
「汗にしみ息をこらして生かす箔」小林金箔能登の奥縁
六十五年重さなき箔技術という太陽の青色通す金箔
毎日を振動と音で金を打つ耳遠くなる箔を打ちきて
子と孫と三代つづいて嬉しうと箔うつつ振動防音の地下

近藤芳仙 秋色 信

寝屋の床あかるませるるつきかげの色やさしくて月を見に立つ
隣家の板塀くちて静かなり赤や黄色の照り葉がのぞく
ゆうらりと烏帽子ヶ岳を出でし陽が庭の錦木真紅にすかす
里山は金山もみちに染まりゆき霜月けふの陽の中にあり
合同歌集手に顔ほころばす歌仲間いろどり深き生の道なり
角ひとつ曲がるも我の背を押して風はゆるまず吹きつけてくる
笠雲の三重にかさなる烏帽子嶺ふきくる風の冷えまさりけり

坂上直美 ウクライナ・ガザ 天

ある日不意にハマス来たりて殺戮す魔墟に残る血塗れの靴
憎しみの連鎖途切れず少年は父母をなくし戦士となりゆく
聞くまいと我が耳閉ざすウクライナ・ガザより響く幼子の声
南へと戦火を逃る人々の約束の地はいづくにありや
憎しみののはじまりはいつ？終わるのは？何も知り得ず幼子は逝く
戦いは対岸の火事安逸を食る私 されど明日は
家もなく家族もない少年よ君にあるのはただ希望のみ

坂出裕子 落ち葉 落

川べりの桜並木の散歩道くれなる落ち葉満開の秋
くれなるの落ち葉踏みゆく川べりの道の散歩のしあはせの刻
まつすぐに飛行機雲は伸びゆけり秋青空に夢を引きつつ
真白なる飛行機雲のやさしさに思ひ出しをり外つ国の旅
外つ国の旅ははるけし真白なる飛行機雲は高く伸びゆき
楽しみて旅せし日も遠くなり秋青空に機の音を聞く
川を見て水を眺めて帰りに来ぬ今日を生きなむ力いだき

佐藤道子

淋しき街

・甲

喜寿祝の額見せくれし眼医者さん今日は代診入院せしとふ
調子良く暫く行かぬクリニツク痕跡も無く空地となりぬ
越してより付合ひ長き酒屋さん四十九日を済ませしと言ふ
子供等がお世話になりし耳鼻科医院張り紙有りて閉院せしとふ
お揃ひで買物されるし隣家の御主人痛で急逝されしと
救急車のサイレン幾度聞こえ来る淋しき街と思ふこの頃
わが街の人口急に減りしことワクチンのせめと言ふ人のあり

篠原まり子

いとおしむ

・羊

小春日が一夜明ければ雪が降る季のめぐりの崩れゆくさま
アナウンサー熊の生懇語る時背きネクタイ子熊の模様
夢に会う友の計報はうつつなれ夢とうつつがぐるぐる廻る
メダカの子時には親の餌食なるニミリの命いとおしきもの
厚き本「ネネ」という鳥棲まわせて折おりに聴く鳥のおしゃべり
眼科にて処方されたマイホーム眼を温めて文字が明るむ
エスコートするがごとくに若き医師九十七の人の腕はも

柴田登志恵

遊びやせむ

・天

草原の遠きかなたの長城の向かうにひろがる地平果て無し
西城へとも遊びし家苞の手塩の皿の藍染め古さぶ
藍染めの手塩の皿の枸杞の実を無常の宴の華やぎとせむ
遊びやせむ遊びやせむと言ふでせう 彼岸の方より引き戻したまひき
いつもよりオクターブ高き応答に励まされ掛けし電話嫌ひが
愛宕さんの高き石段翔け降りる背に翼を見しと思ひぬ
存分にひと代遊びて立ちにしか天女の肩巾の絹雲白し

須川千恵香

パンマツリ

・眉

妹が「香りパンマツリ」の小ポット持ちくれし日は通かとなりて
門辺よりジャスミンの香に振り向けば「香りパンマツリ」五片の紫
パンマツリ枝一面に咲くからに気づけなかつた若木の全容
パンマツリ濃き紫より薄れゆき白へと交はる色の競演
数知れぬ花から苗はなきものか パンマツリらし一本芽吹く
掘り上げて苗床造り水まきつ此のパンマツリ咲けるはいつぞ
白き富士の麓をよぎる新幹線蓮花田園今抜けむとす

鈴木結志

六花

・福

一夜芸自然の力白無垢の六花らんまん牙城をきずく
豊作にかかせぬ天の貢物六花まばゆく大地うるおす
六花咲き「一新紀元」思わせて森羅万象なべて白無垢
のほる日に六花七色夢の園詩情にひたる今朝の寸劇
佐保姫の設計無垢の花園か六花のひかり春をいざなう
寒冷えをわするほどの造形美六花らんまん冬の風物
冬越しの無垢の霊媒見のかぎり六花にしのお沈黙の景

関根榮子

成り年

・埼

「柿いかか」知人の電話二人目に今年は成り年あちこちたわわ
波抜きて会津みしらず送り来し歌の友はも今はもう亡き
身知らずは身の程知らず成るといふ成り年のこの秋思い出す
この畑も防草シートの黒々と重石の水入りポトルがあまた
掘り鉄の若きが二人泡立草の枯れ始めたる鐵路のほとり
「お母さん冬の夕焼何故真赤？」親子の会話店先に聞く
揃え置くソックスにしていつよりか左足より履く朝の習慣

関根和美

志・神・しん

・埼

ひと住まぬ軒先にまだ森永の牛乳箱は外されずあり
 立冬に紫陽花枯れず狂う世の立てこもり八十一歳の暴走
 何びとも邪魔せぬひととき本社への車中に楽しむ一冊を選る
 混み合える車中にとれぬマスクゆえ目を閉じ祈らん眼鏡くもれば
 イスラエルこの語説まれぬ日のなくてミサに与る心重くす
 長き長き歴史に緋く争いの根のふかきかな中東の地は
 ドア飾るリースのまんなか空洞は「しん」なき日本の聖夜のごとし

高尾恭子

秋それぞれ

・大

今生の桜もみじの夕映えを三十一文字の言葉にこぼす
 赤トンボとぶ夕暗れを海こえて「Redoon」の歌の輪つなぐ
 流鏑馬の衣裳とのえ三代の父子は絵巻の点景となる
 武士になりすましてや御所を発つ馬上きらりと眼鏡がひかる
 りびとの持って行けとぞザクロの実いのちふつふつ艶めいている
 山里に突るザクロはさっくりと裂けて鬼子母の口もと赤し
 草餅の甘き小腹にしみとおる芒が原にはや日は落ちて

高津砂千子

ヘルベス(二)

・風

ヘルベスの痛み酒さんと唄いゆくむかし習いし童謡いくつ
 童謡をうたうにつれてよみがえる青年団で集まりしころ
 石炭のストーブ囲み唄いたる夜の分校若きわれらは

「イナシクル」と彫られしブローチ土産に手渡しくれし君も団員

寒き夜も声をあわせて童謡を楽しみしわれらああ若かりき
 ヘルベスが思い出させるなかつた幾星霜を重ね如何にや

電話にて「元氣な声ね安心したわ」「童謡ばかり唄っていたの」

滝田靖子

発疹

・新

早晩のアンテナを鳥ら奪ひ合ひ今日は雉子鳩が高らかに鳴く
 通勤の男らホームに並びるて始発電車のこの賑はひは
 発疹のやはらかな腹ほりほりと掻いてる昼下がり淋しい
 淋しいと思ふ贅沢手に入らぬもの何がある命のほかに
 手に入らぬものの幾つを数へてる永遠に手に入らぬ幾つを
 行く人も帰る人もゐて夕暮れの道をわたしは何処へ行くのか
 低い雲疾く流れゆく夕暮れを亡き人の歌聴きながら行く

田土成彦

白

・宙

冬日差し軒端に低く差し入れは干し大根の白さかげらふ
 かたことと雨戸を揺らす風過ぎて持ち去りゆきぬわれの時間も
 いつも休日午後の日だまりまつたりと淡茶をすするただ息をして
 死亡広告おほかた八十代なればより身に近き事として読む
 もうしばらく大丈夫だと思ふ日とさうでもないと思ひこもこも
 投げ打つた人は投網のおほき輪の縁にぼつんと取り残される
 曼珠沙華咲く野の道の夕暮れは子狐コンキチ通り行く道

田土才恵

霜月

・宙

ただいまという大学生の声すれば厨にひろがる和みの時が
 半年をとうに越えて来て共に住む男孫と馴染む今宵の会話
 帰りに来て晩ごはん何という声にゆるり暮れる秋の終わりを
 夕ごはん何とたずねる一言を温としく聞き霜月終わり
 友達の様に暮らして半世紀同級生夫婦の八十路を越えて

氏神にもろ手合わせて二人立つ散歩の道の夕への折り

本堂に水かがよいの揺れやまず小春日とつぶりわれを包める

網棚に置き捨てられし新聞を読む人のいた昭和の電車
眺み終えし「ジャンプ」を電車に置き捨てて、バブル時代の男は手ぶら

踏切を過ぎし車内の半音階低き警笛一瞬に消ゆ

キオスクの新聞販売やめたとの掲示に昨日は売ってたと知る

最初からバスモで自動改札を通る子は切符の端をつまむ

横須賀線連結部分の蛇腹には管楽器めく息づかいあり

駅に降り無意識に進む方向はかつて通いし学校のある

中島 央子

ありがたう

・森

「ありがたう」言へることの幸せと九十八歳先輩のメモ
両の手を開いて閉ちて繰り返しおもむるに今日の脳を起こす

宅配に届きし小箱は娘より埼玉の芋里芋の味

夕映えを愛でつつわれは歩数計下げて此の世の時間を歩く

夕光はわが身を照らす影長し「陽はまた昇る陽はまた沈む」

タクシーはアプリにて呼ぶ娘の手あぶらかたぶら驟雨すぎゆく

ラメ入りのネイルアート古稀の指うつし身娘に陽は流れをり

永田 進一

法隆寺

・山

斑鳩の里を歩めば法隆寺中宮寺への道菩薩への道

境内の紅葉照り映ゆ法隆寺パワースポット人知れず思う

法隆寺七堂伽藍光満つ松手入れする人もマスクつけおり

廻廊を廻れば公孫樹の葉の落ちて鎮もりおりぬ斑鳩の里

法隆寺の参道行けば藤ノ木古墳案内板に寺の多さよ

法隆寺過ぎればやさし中宮寺東里の家並み抜けて田園

片野池の北に見えるは法輪寺さらに法起寺三重塔

断捨離と開けたる箱にとりどりの毛糸のありてまた捨てられぬ

長きこと遠ざかりいし編み棒が指の先よりするする動く

からす数羽ねぐらへ帰る夕つ方帰る家なきガザの人たち

手にしたる一切れのパン野菜スーブガザの子らへ届ける術なし

食べる物水も無いという記事のとなり節の料理の一面広告

父の歳とうに過ぎたる今にしてなお甘えたき時のありけり

音もなく風にまかせるやればちす終りというをまざまざ見せて

仲西 正子

さんねん峠

・沖

さあ一献と熱燗一合を分かちあいままた近づきぬ短歌の縁

底冷えの別府の夜に熱燗をちびりちびりと饒舌を聞く

行き行けど紅葉に会えぬ国東の耶馬の岩立つ一幅の景

温暖化に紅葉になれぬもの散りぬ九酔溪の谷底深き

九酔溪の谷底のぞきふらつきて転べば拾うわが魂を

突然に転びし姿をたて直し「さんねん峠」の爺様想えり

中村 博子

米寿の夫

・漣

三か月伸びきし夫の米寿祝う家族の会や霜月三日

娘はふたり婿もふたりに孫二人全員集合たったの八名

なかなか時間合わねど秋晴れや米寿の夫へ乾杯の音

つぎつぎと運ばれてくる和食美味し「吉招庵」に脳内くらくら

アルコール好まぬ婿へ気遣いて患者のことなど訊ねてみたり

うから揃う数年ぶりの集いにて話を少し盛り上げんとす

米寿の夫雨にもめげず登下校の児童ら見守り元氣をもらう

西堤啓子

乖離

・天

名月のやつれてもなお明け方に動しむ人をそつとなくさむ
水鳥の塚をちゃぼんと越えること生きられたなら楽しいわが家
手を引けば「やさしいね」と言った人 遠くはるかな発症の夜
アイスパール紙めいる人を呑みこんで立つ黒雲が怒声を発す
他人事にする本能の働きが傷みを遠く放つ 蒼空

サンドバッグ裂けてしまえばべしゃんこの風に揺れいる鳥瓜なり
サンドバッグ裂けてふらふら揺れている行方不明の声見つからず

白子れい

散步

・洛

朝散歩明けざる道の薄暗し帰りの背に旭あがり来

朝詣り御寺二か所と地藏様二か所に祈り捧げてかえる

今日もまた迎えてくるは小鷲にて出で遇う人のあらぬ早朝

疏水辺に佇ちて待ちいる鷺一羽へこめる心ひきたてくるる

一日の過ぎゆく速し何せしとあらねど夕日背なを押しくるる

夕まいり御社一か所地藏様一か所ひと日の感謝をこめて

日の暮れのはやくなりたり夕散歩あるき月を仰ぎて帰る

ばばりようこ

三体の佛

・鹿

うしろ髪ひかるる思いにも似て残月は上弦にうすくうすくかかりぬ
金木犀の樹下を通り抜けてきたるらし訪問者にかすか花の移り香
金の粉^お肩にかからせたるままに訪いきて ためらいがちな宗教のおすすめ
滔々でなくてとつとつと行きつ戻りつ 初心者らしい言葉の端はし
ゴメンサイ^お宗教音痴なると詫びながら せめてコーヒーでもと淹れてやりたり
人間には三体もの佛が内在しているという 喉佛 胸佛 指佛 と
火葬場のお骨上げて 肅しゆく導かれつつ拝がみひろう

浜谷久子

ひととせ

・地

咲きつくす花の命を見るさ庭朽ち褪せることの暗れ暗れしみじみ
地植えする紫陽花大きく株を張り新芽を伸ばす来夏に向かつて
大輪の白色水色 紅の紫陽花大きく咲き誇った梅雨

いく本の挿し木紫陽花うち一本芽吹く緑葉ふとぶとして
ようやくの雨にひんやり生き返る夏の名残のパブリカ^カ茄子^{ナス}
紫陽花は花の終わりを告げる日を失い秋を冬を迎える
執着も諦めもなく母のよう白木蓮が落としてつくす葉

檜垣美保子

兄弟

・鼻

おとうとになにか教える兄の声肩を寄せあい靴紐むすぶ
少年は大きくリュックを前うしろ抱え背負いてもどり来たりぬ
インターホン押さず両手を打ち鳴らす少年の帰宅の流儀たのしく
鯉フライ四切れを前に理をとおす兄と欲望のおとうとである
隧道の出口にうすまく黄の落ち葉人も車も途切れ風吹く
宮島の土産はもみじ饅頭と今日いちばんの真つ赤なもみじ葉
出会いたる雨のち晴れの西の空真つ赤な嘘をのみこむ入り日

福田庸子

真夜

・今

木斛の葉に点りある月光の厚みに真夜のにぎやかさ満つ
霜の朝を生きぬきてきし白き蛾の破れし羽は玻璃戸に付きて
鳥の声透き通りくる秋の日は気候変動をしばし忘れむ
降り立てば高校生らに訛りなし啄木の思ひ遠のきてゆく
焦点の合はぬ話に寄りそふを母に残れる時おもひつつ
少しづつ時代の流れに遅れゆく焦りは去りて諾ふ我ぞ
鑑賞を許さぬ声は彼の国の指導者に通ず画眉鳥鳴けり

握りかへす力はつかに残る手の温もりもたり いのちまだある
産みて三月も経たずにわれを手放しし思ひたうとう聞かざりしまま
皮薄き手をさすりたり骨をさすりたりこの手にとほき日われは抱かれし
銀色の髪さやさやと光りたり眼も口も開かざりしを
手を汚す看取り一度もなざりき嵩の少なき骨拾ひゆく
苦しみを語ることを聞かざりき笑ひは涙のかはりなりしか
前日に会ひに行きしを自らの慰めとして喪の日を過す

藤森 巳 行

ああ我が師

・銀

晩秋の空どこまでも青くして霜月十五日我が師は身罷る
人生に迷ひ乱れた青春に使命に生きよと師匠は教へむ
男なら一度決めたらやり抜くと広布にかけた人生始まる
人生の師匠と決めて青春を熱き心で我は走りぬ
師に仕へ聖教店主を三十二年無冠の人生銀の道なり
厳肅な中にも弟子の誓ひあり報恩感謝の創価学会葬
師のもとに広布に闊ふ日日ありて短歌に紡がむ黄金の人生

船田 清子

秋やいつこへ

・天

霜月の声を聞きても暮れてなほ暑き空気は地表を這へり
「暑いね」の連発のまま霜月に入れば気になる足元の冷え
木犀の香に出合はずにこの秋は夏から冬へはや雪便り
霜月の十一日に近畿ではこがらし一号報せられをり
戦後すぐ求めしわが家に終と南天植えしは母の想ひや
延々と七十年余を白き香と赤き実をもて邪を破ひしか
撒水のわが怠りに枯れにしは植ゑ替へられて雨に凜たり

教へ子は心の在り処問ひかくる十五の彼は疼いてゐるらし
美しくなどと嘘つばい説教を見抜く光が教室の窓にさす
心ほぐす秋陽がそそぐ昼下がりが夫のオカリナ空にとけゆく
公孫樹の黄葉透けるその先に私の希望が隠れてゐさう
もう少し生きてゐたいと念ふこの星は俯瞰せば戦場の色
村里のおうな集ひて御詠歌を唱へる寺の空澄みわたる
西国の霊場巡りの古寺の御詠歌ひびく伽藍の空に

牧 雄彦

灯台

・大

穏やかな海と見えしが岩を打つ波しぶき高く青空に散る
あへきつつ螺旋階段のぼりきて大海原へ翔ばむかわれば
太平洋わたりにて届く大波の岩に砕くる音のぼりくる
タンカーのとほく沖ゆく影見えて晩夏のひかり罅に注ぐ
あああれが波切の町並み人々がけふも暮らせり陽光の下
下りきて見上ぐる灯台入りつ日にひときは白く輝きぬたり
戦時中爆撃受けしとふ灯台のいまはしづかに海面を照らす

松浦 禎子

弦月

・羊

癌細胞混入を告ぐドクターの電話の声に怯むことなく
センター南駅より降りて秋ふかき昭和医大までいつか来た道
再発とう言葉使わぬ主治医よりいま一度生の力をいただく
高齢のゆく末にきて立ち止まる心のこもる一言の前
かつての日手術のあとに訪れしイタリーの旅の愉快をおもう
もう一度がんびりまししょうのひと言を弦月の夜にいだきて帰る
遊ぶひまの時大切に生くるため来年春のお招きを受く

松永智子 音

・嵐

宮本靖彦

父を偲ぶ

・凌

音のなきあかとき闇にさめて聞く十階ビルの一隅の音
 まむかひの棚の上なる螢の火背く赤くそれぞれひとつ
 あかときの闇飛び交ひし螢いまいつくにいのちひそめあつむ
 特攻機のそれとしらずひたすらに配線したるをいまにふりむく
 物の音人の声なき夜半の闇みるとなくみるひとつ螢火
 夜半目ざめきくとなくきく闇の声とほく人呼ぶ声ならむ消ゆ
 かなしみて問ふことばなくペンを置きみるとなくみる玄關の闇

松本多摩子

勘違い

・桜

チューリップ植えんと庭で無防備に蚊に襲われる二十七度と
 花々が勘違いするこの異常さくらが咲いたつじが咲いた
 ご近所と牧野植物園訪ねたり石路の黄色みちに鮮やか
 雨の日は静かな一日隣接の運動場に子ら姿なし
 園庭に泣く子笑う子走る子ら隣接すれば日々賑賑し
 ふんわりとエレベーターへと枯葉舞う上下を終日くりかえすのみ
 灯油買うその重たさは年毎にわが体力の衰え感す

三浦好博

ガザ

・銃

うるこ雲のひとつひとつがガザの子ら嘆くことなく私を見てる
 ジェノサイドに勝つたつもりイשראל報復の種千倍も生み
 何世紀もパレスチナ人とユダヤ人平和に共存して来しに
 今も尚ホロコーストを続けるウクライナでもガザでも我ら
 幾度もやめると世界が言ひをれど戦争とめられない世に生きる
 行き場なく日々ガザに死ぬ子ら知れど死者のごとくに声あげぬ我
 ガザに嗚呼わができる事叫ぶだけ「国際社会と共に見捨てぬ」

銀行に勤め近所の若き娘らに讃美歌教へし父ほがらかに
 空襲に散らばりし家族会ひし時父母ただ一度の抱擁見せたり
 焼け落ちし教会再建計るべく役員集ひぬ我が罹災者小屋に
 子の我等居る場所のなく会議の間外に居たりき初冬の宵を
 一度すらの旅行もせず家族支へ教会につくし我が父見事
 八十にて逝きし父母離れず教会墓地に眠るしあはせ
 記念祭に聖書讃美歌眺めつつ「お前は自由に」と言ひし父想ふ

三好聖三

ブラック

・伊

ほうれん草のまわりに生えし草を刈る霜月尽の空牙ゆる朝
 もぐら退治に効くのかどうかベットボトルの風車差す
 沖をゆくカーゴボートのシルエット僅かな差異を羨しみながら
 家出して一月を経て戻りたる猫に距離置く子等は取り分け
 ソンタクとサランドンはスーザンで逢い茶店（痲き）でブラックを飲む
 喫煙は時代遅れであるらしいならば私もなのだろうたぶん
 俺は邪魔、だから帰ったって？なんだなんだよ勝手に決めやあがって

御代田澄江

銀の鈴

昇る日の隠るるほどに海霧の込めて朝より霧笛響けり
 秋来たり抜け毛侘しもシャンプーの櫛に掛かりてあまた抜け来ぬ
 終に白き花咲き「もつてのほか」は紅く咲き初め秋深まりぬ
 何となく己自身に「おめでたう」と言ひて今宵の般若心経締めぬ
 風邪長引く明日もう一度行けと訓す子のゐて吾の幸ひと思ふも
 一度は秋刀魚を思ひ焼くさんま少し小振りて少し塩つばい
 今亡き姉と待ち合ひし「銀の鈴」東京ハトバス乗りしかりしよ

漠然たる不安に逝きし龍之介の細長い顔と内供の鼻と
自尊心に苦しむ李徴は我なりと書きたる子あり教を説みて
エリス捨てし豊太郎の選択を問えば議論が二時間つづく
裏切りて友を死なしめし先生の告白を聞く生き恥として
禿頭を黒く塗られて頬杖の茂吉が見ている最上川の虹
人の心知り尽くしいる兼好を読めば時代の隔たりはなし
主語のなき源氏を読みて英語より難しいと生徒が洩らす

桃原 佳子

雑草の種

・沖

朝まだき風さやかなる畑に来て眼鏡をかけて春菊を蒔く
こまやかに羽をふるわすは喜びか花に寄りゆく蜂を目で追う
秋暑く打ち上げ花火夜空占む今年も災害多き年なり
コンバイン稲穂の中を進みゆく猛暑の被害忘れしごとく
秋晴れのこの高天に雑草の種飛ぶ蝶と競いてみぬか
予報どおり雷の轟き豪雨なり窓に張り付く雑草の種
刈り株に揺れる二番穂三番穂耕耘機に驚の付きゆく

山野 幸司

インド

・沖

師の後にニューデリー空港降り立ちぬインドの風は強く乾けり
鋭き目銃をさげたる兵隊は何に備える人込みを縫い
なんとなく仰げば空は青々とインドに立てり砲を抱く
ニューデリー空港過ぎる旅人の光か闇か税関に立つ
待合いに眺める先にサリー揺れカレの香る道は暗闇
初めてのインドに一步おどおどと車に笑顔運転手ラジュ
車窓より眺めしインド絵のように触れず語れず唯夢の中

里山を崩して平らに区画せし坂道多き町となしたり
町名は桜・緑や松・竹と安直の名が全国にあり
大楠は生き残りたり町角のシンボルとして木蔭広げたり
大楠に鴉巢をなし通行のわれらに低空幾度もおどす
大楠よりあとから人は住みつきて邪魔だと切りぬ 見事な切株
玄関を開くれば一本の黄金立つ年に一度の夕映え公孫樹
ふと成りぬばかりの短歌をなこれと妻の言ふ声聞けなくなりけり

養学 登志子

象形の鳥

・俊

吾の歌が象形文字の鳥となりいとし雀ら帰来しこと
鎮もりの黒よりうかぶ佛頭は並河萬里の残ししパーミヤン
パーミヤンの闇よりうかぶ佛頭をそばに掲げてすぎ来し年月
ふるさとの訛言葉もうすらげば長く生きしかとふいにおもうも
戦争とは独りの心のゆがみとも勝敗いずれも悲惨しかあらず
戦渦の死もしも蘇生をしたならばもつと悲惨なこともかもしれぬ
彼岸花一本白い画布に描きこの寂しみを知る画家ならむ

横田 敏子

冬の虹

・福

晴れ曇り時折時雨るる昼下がり色あざやかな冬の虹立つ
七色のアーチをかけし冬の虹暗きこの世の吉兆となれ
スーパリーの野菜コーナー瑞々とはち切れそうなる冬野菜たち
その脇の白菜、カボチャ、大根のカットを買いぬこれで十分
シングルベル早やも流るるスーパリーに心急かさる今日師走入り
買い物も歌会もありて躊躇なく免許更新 必要不可欠
若き日に登りし穂高の映像に想いふくらみじんわりとする

吉永惟昭

師走

・熊

師走なり語呂にも匂うせつかちさ借財なきか確かめてみる
 いずちなき正義の旗を押し立てて戦火止めざるガザの双方
 目を閉じる断崖のみが浮かび来て歌稿は沈む白夜の涯に
 クリスマス異郷の祭と知りながら値上げ知りつつ予約すケーキも
 散ればこそ花は忠なり不義ならず独り足湯に浸りつつ惟う
 東京は今も吹くかよからっ風 銭湯で待つのは寒かったよなあ
 ぼつり、皇帝タリアの花びらが落つる終活師走ならずや

久我田鶴子

タルトタン

・羊

降りきたる小雪が肌に溶けゆくを語りて誘ふ温泉帰りは
 自がこを二のつき三のつきにしてたすけるはかけがへのなき
 ひとまづは身を脇に措くこのひとにつちかはれしものほうと見てゐる
 収穫をせずに残しておきたりとネットに守られ林檎が真つ赤
 日に二度の水やりの夏越えて秋 寒さ足らねば、あをこ、の林檎
 べにこはくのタルトタンを召しあがれタージリンティがカップに注がる
 りんご蔵のかをりはいかが朝いちばん原を開くるよろこびを言ふ



■「地中海」創刊50周年記念号より■

「地中海」の系譜

椎名 恒治

一略

香川、山本、塚崎、小関、岡野、編集の片山、堀内、椎名と
 これを一本の系譜にくくることは不可能である。前述の四長老
 を念頭に入れて、たとえば、「詩歌」、「国民文学」、「釈道空の系
 統」、「博物」の系統、その他出自の異なる多くの流れが合流し
 て注いでいるのが「地中海」である。一枚岩ではない。ある時
 期「地中海を泥海化するな」というような声も聞こえたことが
 あった。「スタコンニャクダ……というひとびとは残してゆく」
 と清濁あわせた香川進の度量に「地中海」は支えられてきた。
 いまどき系譜などに拘る者はいないと思うけれど、さて、「羊
 雲離散」「黄金記憶」二冊を止めて天折した小野茂樹は香川進
 が最も期待する若手であった。その小野の生存時代を全く知ら
 ない久我田鶴子、関根和美などその他多くが、小野茂樹の表現
 を敬慕展開していることは特筆に値する。香川進が前田夕暮の
 人を知る前に「水源地帯」の表現そのものに心酔して短歌制作
 に入った経緯と思ひ合わせて、表現の本質を思わないわけには
 いかない。

「源泉的精神の、本質的な方向を指向する」「短歌の実作に
 より生の意味をさぐる」創刊の理念は不動である。全ての支柱
 グループと多くの協力の手に成る本記念号の五十年を、各々自
 らの歴史と重ねて明日の糧とされるよう期待したい。

〔「地中海」の五十年〕稿の末尾 平成14年5月号〕

穴

久我田鶴子

まだ稚き「共匪」斃せり目に沁みるちがや靡ける丘の上の
 塚 『離離航海』

「とおい穴」一連十首の中から。

「共匪」とは、中華民国統治下の中国において、中国共産党の指導のもとに反政府的に活動したゲリラのこと（ウイキペディアより）。「匪」は、悪者の意で、中国共産党のゲリラを卑しめて言った語である。「共匪」、それもまだ「まだ稚き」者を斃した。「斃」は、ここでは「ころす」の意。「まだ稚き」と見えた敵を殺したのである。

加害の事実を述べ、二句で切れたこの歌は、三句目以降では茅の靡く丘を描き出す。その風景は静かで美しい。そして、淡々と表現しながらも、「目に沁みる」からは情感の滲みを感じられる。

年譜によれば、「昭和十八年（二十歳） 現役兵として岡山百三十七聯隊に入隊。中文、北支、南支を転戦。広東省海豊県青草鎮で終戦を迎える。」とあり、「とおい穴」は直太の戦争体験であるらしい。

一連の中には、このような歌もある。

戦車壕の底いに脚部骨折の馬の飢うるも見て通りたり

胸のへの隆起も既に凍ていて二つばらかに天に触れいる
 ゆるがせにならねば死も生も触るるなくただ黙黙と焚火をか

こむ
 君葬る火煙一条のほのおなしいくばくの天を染めいしならん
 げに寒き面もちをして竹ちおりぬ屍体を落とす穴黒きなか

「穴」とは、「塚」であり、また「屍体を落とす穴」なのであった。

一首目は、壕の底に骨折して動けぬまま飢えている馬を見捨てていく歌。その馬よりも、兵のほうが戦場では低く見られていた。二首目は、凍てついた死体。胸の二つの隆起からすると、女性だったのだろう。三首目は、極限にあって生も死もなく、ただ黙々と焚火をかこんでいる。四首目は、「君」を火葬にする炎。「君」とは、大切な戦友であったのか。「天を染めいしならん」とあるところを見ると、作者は「君」が火葬される場を見てはいない。どこか離れた場所死に、火葬に付されたことを誰かから聞いたのかもしれない。五首目は、死体を埋めるための穴掘りの作業か。黒い穴の中に佇む姿は、屍体が落とされる様をもうすで見せてしまったかのようだ。

再び年譜に戻ると、「各地転戦中も戦闘の合間をみて中国の風物や唐時代の風俗画、漢詩などの鑑賞、唐詩に關しての涉獵など文学への情熱を持続する。二年におよぶ收容所生活の間も詩作や中国の原典に接し無聊を慰める。」と続く。幼い頃から漢詩等に親しんだ直太にとって、中国は憧れの地であったにちがいない。戦闘の合間にも中国の文化に触れ、文学への情熱を持続したという。戦地において、戦闘に明け暮れてばかりいたわけではなかった。戦地において、持続し得た文学への情熱！（片山貞美は、直太の追悼文で「持ちつづけた脱俗気分」と書いている。）

昭和二十二年（二十四歳）、直太、中国より復員。

今日の二人

秋を詠う

湯浅勢津子

雲ひとつなき空のもと咲き誇るさるすべりの揺れしほしながむる
 仏壇に青きみかんを供えしが日日色づきて敬老の日来る
 マスクせしわれに匂いく金木犀のんびりとゆく遊歩道にて
 かさこそと棚田の稲穂さざめかせ群れて飛び交う小雀のあり
 秋の色ここにきわまる曼珠沙華畑に沿いて紅をよそおう
 ふるさとの柿は熟して青空に捧ぐがごとく村しずかなり
 熟したる富有柿ひとつ手のひらにのせて偲びぬ亡き夫のこと
 秋雨に涼しさつれて降り注ぎ濡れしコスモス頭を垂れる
 いちじくのひとつを取りて口にするひとり暮らしのひんやりとして
 人住まぬ庭一面にコスモスの花咲き乱れ夕陽をはじく
 おすそ分け手渡ししてくれるマスカットマスクの下に笑顔が見える
 廃屋の壁に伸びたる蔦の葉の下ですず虫秋を知らする
 前を行くうしろ姿のなつかしき幼なじみは髪白くなり

短歌に夢中

平成十四年、主人が胃癌で亡くなり子供に恵まれなかった私はひとりぼっちになりました。美容室を経営していましたが、余命一年と宣告され、主人の介護に専念しました。餓鬼大將のように変わっていく姿を心をこめて見守りましたが、宣告通り一年であの世に旅立っていきました。

失意の中で、このまま老いていくのはきつと後悔すると思ひ、前向きに行動しようと思ひました。そして、文章教室、詩吟教室、日舞教室等々、多忙な生活が始まりました。ところが気は若く持っても、体は老いていく一方で続いたのは詩吟だけです。

近くの公民館で短歌教室を見学して、これだ、と心が動き、頭の体操に挑戦することになりました。八十歳で出合った短歌で、暗かった生活が急に明るくなりました。教室は同年くらいの人達で会話ははずみ、月一度の会が待ち遠しくなりました。

文法もかなづかいも理解できませんが、先生の指導によって短歌を作るのが楽しくなりました。五七七七七と指折り数えて短歌に夢中になっています。十一月末に引越しますが、元気で頑張ろうと思ひます。

今月の二人

わたしにつながる人びと 杉本 直美

アパートへ帰る娘に用意した米と野菜と「着いたら教えて」花愛す叔母の遺言は樹木葬あの人らしいとひとりつぶやく訪うも出迎えるはずの祖母が逝きコスモス揺れる庭に行む「ビンの蓋開けて」と渡す母の手は七十年の年月を刻む畦道の向こうから祖母が帰り来るそんな気がする黄昏時にコンビニでプリンを二つカゴに入れ仲直りする決心がつく読み聞かせの練習台にと狙うのはYouTube 見る中一男子やむを得ず総菜並べた食卓に「豪華だね」と言う無邪気な息子ら祝い酒下戸の夫が買い求む何周年かの結婚記念日料理などしたこともない父が剥き吊るした柿が西日に透けて蕎麦食べて「うまいな」と笑む父の顔が吾の心を温め続ける誕生日は「カネが欲しい」とスマホ見つ言葉だけよこす思春期の息子漬物を混ぜる手に見る遺伝子は祖母・母・私と螺旋でつなぐ

夢見た少女は今

私は「もし生まれ変われるなら、平安時代の姫君がいい」と夢見る少女だった。きっかけは、平安時代を舞台にしたティーンズ向けの小説だ。きらびやかで優雅な世界、麗しい公達と姫君の挿絵、ハラハラドキドキするストーリーにのめり込んだ。シリーズを読破した頃には、古文の単語テストは得意分野になり、姫君の教養のひとつでもあるお箏のお稽古まで始めた。ただ、姫君にはなれない決定的な事がひとつあった。「私に和歌を詠むことはムリそうだ」。

あれから三十年以上の月日が流れ、まさか私が短歌の世界に足を踏み入れようとは。誘われるままに、なんの知識もないまま入会したものの、月々の締切にやっと紋り出した歌は短歌というにはほど遠い。そして、こんなにきちんとした冊子に私の歌が掲載されているとは、裸を見られている気分だ。入会して一年以上が経ち、上達の兆しは全く見えないが、運転しながらネタと言葉探しをすることは定着した。いつかは平安時代の姫君…いや、やり手の女官のようにすらすと美しい歌が詠めることを夢見て、今日も頭の中で必死に言葉を探る。